

2021（令和3）年度 京都大学 入試問題 文系 第2問 解答例

問一

戦中は、空襲後の路上死の話は珍しくなく、一人の少女がどこで撃たれて死のうと、些細な事件であると思われるから。

*傍線部の（したがってまた、解答の）主題は「さういふはなしのたねは、その場所がどこであらうと」である。これが解答化されていなければ、失格である。

問二

隣室の少女は、青春を思わせるシャンソンの歌声が筆者を毎朝楽しませ、戦時に束の間の安息であったが、気の毒にも直撃弾に撃たれ、戦争の犠牲者の一人となったということ。

*「カナリヤ」＝「歌う小鳥」は、「少女」の隠喩。「あはれな」の解答化も忘れないこと。

問三

戦中の筆者は、隣室の少女と交流せず、うわさを無視し、その死の不吉さもすぐ忘れ、いかなる経験にも直接関与せず、かろうじて無事な現在に安住して外界を批判し、何とか忍び続ける生き方を無自覚にしていたようであるということ。

問四

空襲の猛火で筆者の部屋の古本がすべて灰になったのに、古今集の一枚だけ焼け残ったというのは、友人Aがわざわざ焼跡で見つけたことも含め、合理的な常識から見れば、偶然の程度が普通ではなく、文学的虚構と感じられるから。

*「古今集の一ひらだけが焼けのこつた」というのは、偶然にも文学的趣向がありすぎるので、「はなしができすぎて」いると感じられるのだが、さらにこれは「Aのはなしに依ると」という伝聞のせいでもあって、「ウソのやう」だと思われるである。

問五

前年の筆者は、外界の現実的な経験に直接関与せず、心惹かれた隣室の少女とも交流できなかった。終戦の翌年、前年までの生き方を自覚したが、外の美しい藤の花には手が届かず、筆者は今も、自分が望ましいと感じる対象とはつねに間接的にしか関われない運命にあると思われるということ。

*問三の「すべて」とは異なり、こちらは「花」に限定しての「すだれ越し」である。

*「廻合せになってゐるらしい」という文末表現も適切に置換すること。